

9月バス例会

だれも知らないくらしき



遍照院三重塔

主催 備陽史探訪の会 平成11年9月26日(日)

担当 歴史民俗研究部会 講師 平田恵彦

9月バス例会 だれも知らないくらしき

《探訪スケジュール》

福山駅北口集合	7:45	
福山駅北口出発	7:50	
福山東IC着	8:05	
玉島IC着	8:30	
遍照院・熊野神社着	8:45	トイレあり
遍照院・熊野神社発	9:25	
藤戸寺着	9:50	トイレあり
藤戸寺発	10:20	
総願寺跡宝塔(子観)着	10:45	
総願寺跡宝塔(子観)発	11:05	
下津井城跡下着	11:30	
下津井城跡本丸着	11:50	トイレあり(到着後、城域を見学)
昼食開始(昼飯由膳)	12:10	
下津井城跡下山開始	13:00	
下津井城跡下発	13:15	
宝島寺着	13:55	トイレあり
宝島寺発	14:30	
連島公民館着	14:40	トイレ休憩
連島公民館発	14:55	
厄神社本殿着	15:10	トイレあり
厄神社本殿発	15:30	
籠取神社本殿着	15:50	トイレあり
籠取神社本殿発	16:15	
連島公民館着	16:35	トイレ休憩
連島公民館発	16:50	
玉島IC着	17:10	
福山東IC着	17:30	
福山駅北口着	17:50	

《注意事項》

- ★団体行動です。くれぐれも自分勝手な行動は慎んでください。
- ★御朱印帳は到着後すぐに寺務所(庫裏)に提出してください。
- ★下津井城などで草花を摘まないでください。
- ★ゴミ(弁当殻・空き缶など)はすべて持ち帰ってください。

「だれも知らないくらしき」資料

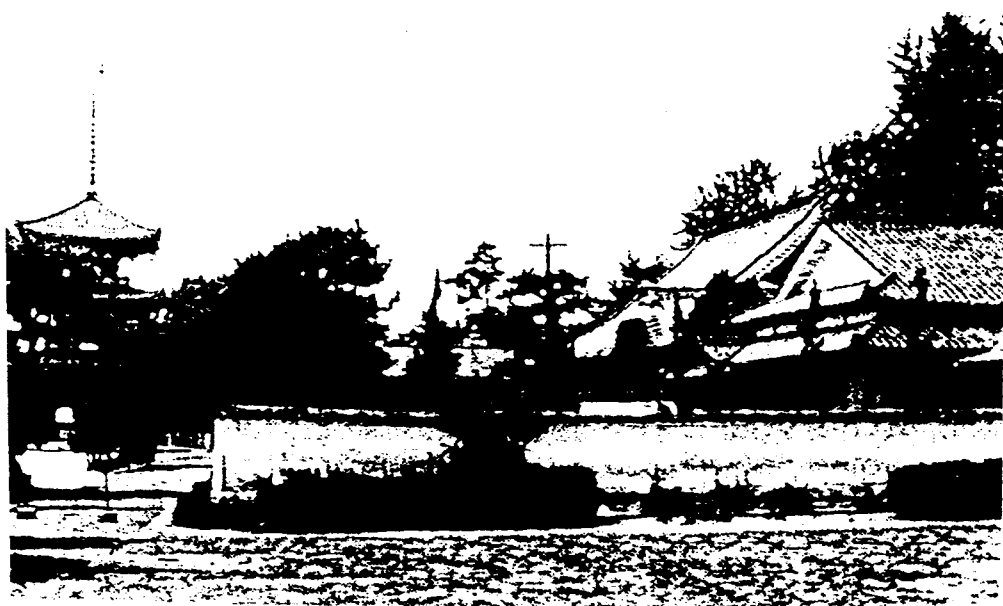
遍照院（倉敷市西阿知町464）

倉敷市西阿知町にある寺院で、正式名称は神遊山神宮寺遍照院という。もと古義真言宗御室派（こぎしんごんしゅうみろは）の中本寺で、現在は別格本山である。

寺伝によると、花山天皇の勅願で、寛和元年（985）智空上人の開基という。延久元年（1069）には後三条天皇の勅願寺に列せられたというが、明らかではない。本尊は十一面観音菩薩。本堂は3間5間、御影堂（みえどう）は方3間、三重塔は方3間、そのほか鎮守十二社権現、弁財天などがある。

三重塔は国指定重要文化財で、寺伝では知海僧正が永享年間（1429年～1441年）に建立したとされていたが、文化庁が昭和41年（1966）から翌年にかけて修理解体した際「応永二十三（1416）年丙申五月十三日 大願主 敬白 知海次郎兵衛」の墨書が発見され、建立はさらに10数年遡（さかのぼ）ることが明らかになった。これによって、同寺が天正年間（1573年～1592年）に倉敷市笹沖の足高山から現在地に移った、という地元の伝承も誤りであることがわかった。また、修理解体の際、礎石の下から出土した鎮撫具（ちんぶく）容器である備前焼の壺も南北朝～室町初頭のものであった。

『黄薇古簡集（おうびこかんしゅう）』によれば、戦国時代の永正14年（1517）6月に「某元資禁制」が当院に出されているので、猿掛城主荘元資（しょうもとすけ）から保



《遍照院遠景》

護を受けていたことがわかる。桃山期には毛利氏が寺領を寄進し、末寺31か寺を有する備中地方唯一の中本寺として栄えたという。

江戸期には岡山藩主池田氏の祈願寺となり、寺領50石をもった。当時、寺中には鐘楼堂をはじめ金剛院・善明院・禅園院・普門院の4院があり、末寺としては倉敷市の朝原山安養寺など24か寺が確かめられる(『備中誌』)。また、「備中国古義真言宗本末帳」によれば、寛政3年(1791)段階で、本寺は仁和寺、寺中10か寺、末寺30か寺だという。しかし、天正・寛文・享保・寛政と4度にわたる火災で本堂・祖師堂・客殿・宝蔵などを焼失した。さらに高梁川氾濫(はんらん)の水害によって寺運が衰え、江戸時代末期には末寺23か寺に減ったという。

遍照院三重塔

大正14年(1925)国指定重要文化財。倉敷市西阿知町の遍照院にある中世の仏塔。方3間、本瓦葺。

形式としては通常の三重塔で、基本の様式は和様である。初層塔身の腰には勾欄(こうらん)のない縁をめくらし、柱は総円柱である。中央の柱間には板唐戸(いたからど)を釣り入れ、左右脇の柱間は連子窓(れんじまど)である。斗拱(ときょう)は三手先(みでさき)で、中備(なかぞえ)は中央が双斗(ふたつと)、左右が間斗束(けんとうつか)。柱頭と斗拱の尾桷(おだるき)に乗る三ツ斗の先に木鼻(きびな)を出し、先の双斗やこの木鼻の形に室町時代初期の特徴がよく現れている軒は二重繁桷(ふたじゆうはるき)。なお、二層目、三層目の軒裏も同様である。ただ二層以上では左右柱間に中備(なかぞえ)を省略し、中央柱間は二層目が双斗、三層目は間斗束を入れている。また、二層目、三層目の塔身の周囲には和様の勾欄をめくらす。



《遍照院三重塔》

初層内部は拭板敷(ぬぐいだしき)の床に來迎柱、來迎壁を立て、その前に仏壇を設けて、金剛界大日如来を安置する。天井は内陣上が折上格天井(おりあげごうてんじょう)、外陣が鏡天井である。この塔は昭和41年(1966)から翌年にかけて修理解体が施され、その折りに三層目東側の軒桁(のきげた)下の実肘木(さぬひじき)に墨書が発見され、「応永十三年丙申五月十三日 大願主 敬白 知海 次郎兵衛」と判読された。材を丹(に)、壁を白色、木口(にくち)は黄土にそれぞれ塗り分けられ、実に美麗である。

【参考】遍照院聖観音立像

昭和34年(1959)岡山県指定重要文化財。

倉敷市西知町の遍照院にある古代末期の仏像。檜材、一木造の素地。ただし、当初は彩色かと思われる。頭に筒型宝冠をいただき平安時代としては普通の尊形(そんぎょう)で、像高90cm。左腕、右手首、天衣(てんぬ)の一部、両足先、それに足下の荷葉座(かしょうざ)など、いずれも後補。全般に表現は素朴といえる。また一木造ではあるが、穩和にまともっており藤原時代中頃の佳品である。



《遍照院聖観音立像》

熊野神社 (倉敷市西阿知)

倉敷市西阿知にある元郷社。祭神は伊弉冉尊(いざなみのこと)・天照大神・瓊瓊杵尊(にぎはこみこと)など12神。古くは「十二社権現」と称されていたが、明治2年(1869)に熊野神社と

改号した。創立年代は定かではないが、天保9年(1838)に書かれた『吉田殿由緒書』には後三条天皇(在位1068年~1072年)の勅願の社となっている。天正年間(1573年~1592年)のころ火災で焼失したが、寛文9年(1669)岡山藩主池田氏が木材および玄米15石を普請米として寄進、再建された。

【参考】熊野信仰

紀伊熊野山に対する信仰。熊野は山岳重畳(しょうじょう)とした地域で、古代から死亡した先祖の霊の集まる神聖な場所と考えられていた。このため平安中期には修験者(山伏)が好んで集まり、修行する場所ともなった。平安末期には「蟻の熊野詣(ありのくまのもうで)」という言葉も生まれたほど、多くの参詣者があった。

信仰の中心点は、家都御子神(けつみこのかみ)の祀られる本宮、速玉大神(はやたまのおおかみ)の祀られる新宮、結神(むすびのかみ)の祀られる那智宮で、合わせて熊野三山と称される。熊野信仰の発展にともない、岡山県内にも熊野神社が各地に勧請されて広く祀られるようになったのは、鎌倉時代ごろからと考えられる。

倉敷市大字林字郷内の熊野神社(重文の本殿をもつ最も著名な神社、かつては五瀧尊龍院と一体だった)、真庭郡落合町上河内の熊野神社などは古いものの一つであろう。熊野神(熊野権現)の眷属神(けんぞくしん)である若一王子(わくいおうじ、略して王子権現)も県内各地に祀られている。『備中誌』によると、備中地域では、倉敷市酒津および羽島、都窪郡清音村古池および軽部、浅口郡船穂町、新見市西方、岡山市下足守などにも勧請され祀られている。

藤戸寺（倉敷市藤戸町藤戸57）

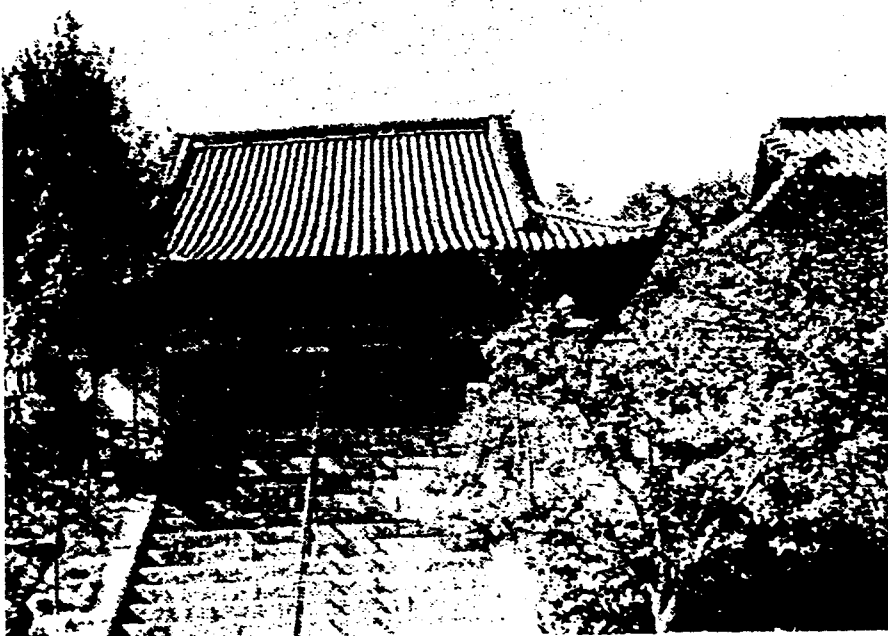
倉敷市藤戸町にある真言宗高野山派の古刹。正式名称は補陀落山（ふだらくさん）千住院藤戸寺という。本尊は千手観音。

『藤戸寺縁起』によると、文武天皇の慶雲2年（705）藤戸の海に像が出現し、堂山に奉安したところ靈験が現れたという。その後、天平年間（729～749）弘法（くぼう）のため児島の地に巡錫（じゅんしゃく）した行基は、堂山にこの千手観音を本尊として藤戸寺を創建し、自ら開山になったといわれる。やがて聖武天皇の勅願寺となり、大同元年（806）征夷大將軍坂上田村麻呂に命じて、この寺を造営したと伝えられる。

元暦元年（寿永3＝1184）の藤戸の合戦後、佐々木盛綱が先陣の功により児島の地を源頼朝から賜り、この寺の修復と源平合戦の戦没者、渡海案内の浦の男の追福の大法会をして、寺の前の小島に供養塔を立てた。この島を経島という。この時以来、寺紋に近江源氏佐々木氏の紋所四ツ目を用いる。

天文年間（1532～1555）、次いで天正18年（1590）兵火にあつて灰燼（かいじん）に帰し荒廃したが、江戸時代に岡山藩主池田氏の保護を受けて再興、明治維新を迎えて今日に至る。

なお、境内には岡山県指定文化財の石造五重塔がある。従来は嘉禄（1225）の造立といわれていたが、寛元元年（1243）10月18日の建立ということが昭和47年（1972）の調査で判明した。



《藤戸寺本堂》

藤戸寺石造五重層塔

昭和33年(1958)岡山県指定重要文化財。倉敷市藤戸町の藤戸寺にある中世の花崗岩製の石塔。総高355cm。相輪は後補。基礎は低平、塔身はむしろ縦長に造り、二重目以上の塔身はその下の笠石上に刻み出す形式だが、笠石の軒口は厚めながら軒反りはゆつくりとした真反りに近い落ち着きを見せるなどかなり古様である。塔身の四方はそれぞれ縁を取り、蓮華座に座す仏各1体を薄肉彫にしているが、いずれもすぐれた作域を示している。塔身北面下部の縁取りに、寛元元年(1243)10月18日の刻銘があつて造立年代がわかる。鎌倉前半期様式の石造層塔として全国的にも数少ない事例である。



【参考】藤戸合戦

元暦元年(寿永3=1184)12月7日、源平両軍 〔藤戸寺石造五重層塔〕
によって現在の高坪山(現山陽ハイツのあたり)・

日間山から粒江種松山北麓にかけて藤戸海峡をはさんで行われた合戦。

寿永2年(1183)水島合戦に勝った平氏は、瀬戸内海の海上権を手中に収め、屋島に本拠をおいて西国を制し、京都奪回を目指していた。平氏の大將左馬頭行盛は兵船2千艘を率いて児島に進出し、種松山の東北麓に軍を構えた。その意を察した源氏の大將三河守源範頼は2万の兵をもって日間山一帯に布陣した。両軍の距離は近いところで500m~600m、遠いところでも2500m~2600mだが、海峡の潮流が激しくて渡海は不可能。平氏は扇を振り嘲笑、源氏側はなすすべもなく日が暮れる。源氏の武將佐々木盛綱は弟高綱が宇治川の戦いで先陣の功をあげているので弟に負けじと思案を重ね、近在の浦の男に浅瀬を聞き瀬踏みして、目印に小竹を立てた。のち、ことの露見を恐れた盛綱浦の男を刺殺。翌日盛綱は数騎を率いて浅瀬を渡りつて先陣の功を遂げ、平氏を屋島まで敗走させた。この藤戸合戦の功により盛綱は源頼朝から感状を得、児島の地を賜った。これは『平家物語』に詳しい。

史跡としては、藤戸寺・経が島・先陣庵・浮洲島・笹無山・一ツ松・鞍懸の松・乗り出し岩・清滝・かがり地藏・引馬嶋(た)・浦男屋敷・かうげ崎・正森山・一枚畑・佐々木谷などがあり、盛綱と浦の男を扱った謡曲「藤戸」は有名。大正13年(1923)野上弥生子が戯曲「藤戸」を、昭和44年(1969)に有吉佐和子が義太夫「藤戸の浦」を書いている。

【参考】謡曲「藤戸」

『平家物語』の「藤戸」の段を典拠とした能の曲名。

佐々木三郎盛綱が藤戸の先陣の功で源頼朝から賜った児島に着任し、人々に訴訟のあるものは申し出るように告げた。すると一人の老女が現れ、盛綱を見て涙を流し、我が子を殺して海に沈めた恨みを述べる。盛綱は1年前の3月15日夜、馬で渡る浅瀬を教えてくれた若い男を他言を恐れ殺した旨を語るが、老女はわが子を帰せと盛綱に迫った。そこで盛綱が死んだ男を吊つてやると、漁師姿の男の亡霊が現れ、恨みをいい、海に沈められ流されてゆくさまを再現してみせ、やがて成仏してゆくという筋である。作者は世阿弥元清といわれるているが未詳。

総願寺跡宝塔（倉敷市児島下の町）

昭和33年(1958)岡山県指定文化財。倉敷市児島下の町、王子権現の祠のそばに立つ中世の花崗岩製石塔。総高280cm。ごく自然石の基礎上に四隅に面を取った不正形方柱状の塔身が立ち、首部の上に軒の深い大型の屋蓋(おくがい)がかかる。その軒は水平に延びてほとんど反りがなく、軒口はやや斜めに切つてある。降棟(くだりむね)の流れも穏やかで、全体に形式にこだわらぬ鷹揚(おうえい)さがある。頂上の太い相輪もどこか素朴である。

現東面には頭上に天蓋(てんがい)をいただき、蓮華座に座す定印の阿弥陀如来、南面には多宝如来、釈迦二仏並座の相、西面は仏座像(弥勒菩薩?)、北面は不動明王立像をそれぞれ薄肉彫に陽刻する。ただ南面と北面は火災の影響を受けて赤っぽく変色し、石面の損傷も大きい。また、塔身四隅の切面には長い銘が刻まれていたというが、風化していまその銘文をたどることはできない。四方仏の組み合わせは珍しいが、ことに東面の阿弥陀如来座像の可憐、優美な表現はきわめて精緻であり、わが国の石仏の中でも屈指の傑作である。

塔身四隅の切面はそれぞれ経の下文であるが、東南、東北両面の文章からこの塔が総願寺に建立され、一切衆生の現世安穩、後生善所を祈つて建仁3年(1203)2月10日に建立されたことがわかる。この刻銘を拓本によって検出したのが倉敷市文化財保護委員だった多和田彦氏である。昭和24年(1949)のことであった。ちなみにこの塔は石造宝塔中、全国で2番目に古く、様式的にも鎌倉初期の基準作例としてきわめて重要である。全国的には「王子権現宝塔」の名で知られる。

総願寺は寛文年間(1661年~1672年)の池田光政による寺院整理で廃絶した。元は近くの鴻八幡宮の別当寺として栄えたという。石塔に不動明王が刻まれて



《総願寺跡宝塔》

いるのは熊野信仰の影響と考えられ、どうやら古くは熊野修験道の寺院であつたらしい。

【参考】王子権現信仰

王子権現は熊野若一王子(くまのやくいちおうし)権現のことで、熊野信仰の流れをくむものである。「新熊野(いまくま)権現由来」によれば、「役行者の高弟義学の徒、熊野本宮の御奥を奉じ備前児島に上陸し、靈地を求めて四十九カ所に神奥をとどめ祀る」とある。有名な王子ヶ岳の王子権現や児島下の町の王子権現はこれに関連するものと思われる。祭神は事解之男命(ことさかのおのみこと)である。

王子権現祭祀は備前・備中・美作の一円に分布、広く信仰されている。そのうち総社市軽部には「おうじさま」と呼ばれる宮があり、乳神さまとして布製の乳房を備える。また、真庭郡勝山町見尾では、旧暦12月14日、15日に王子権現の社殿で若者がトギをして夜を明かす特異な習俗がある。

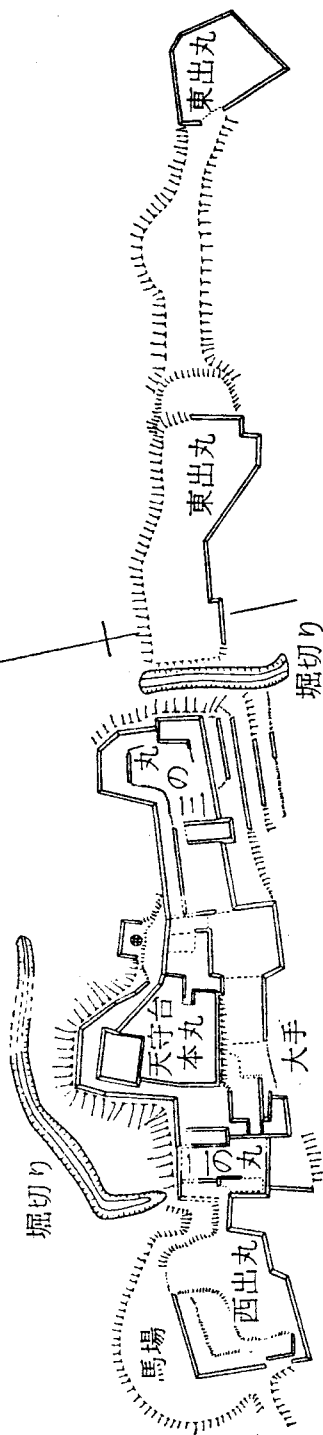
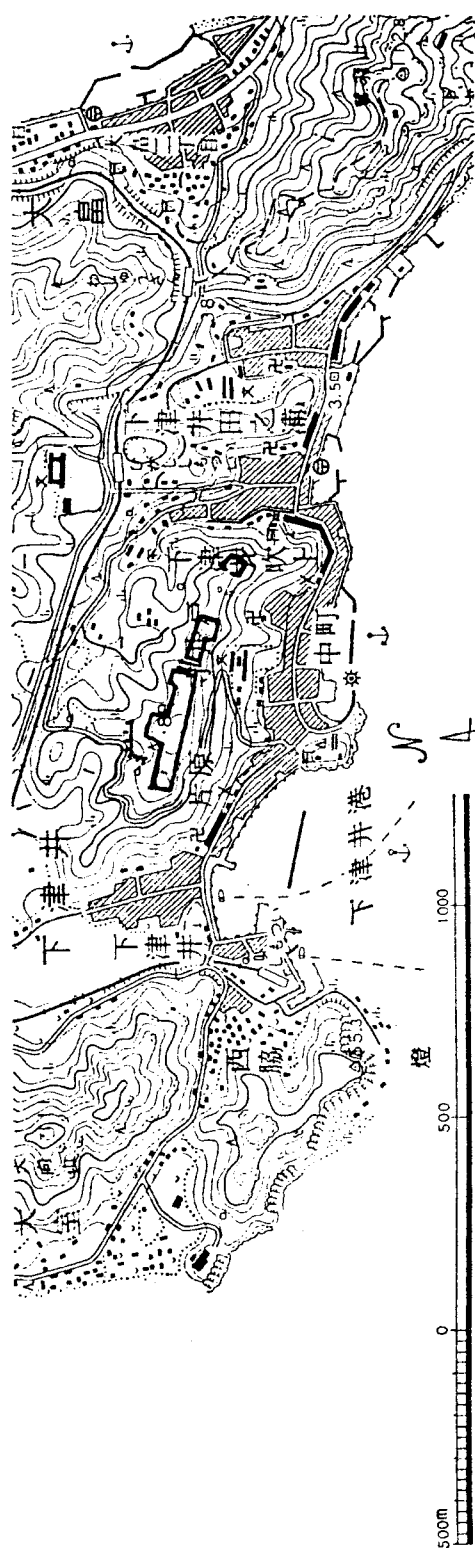
下津井城跡(倉敷市下津井城山)

下津井城は下津井港背後の城山山頂部にある連郭式の近世城郭遺跡で、東西約560mにわたって城郭施設が構築され、その遺構がよく残っている。昭和43年(1968)岡山県の史跡に指定された。

城の来歴を示す明確な古文書はないが、宇喜多直家の子秀家が、天正年間(1573年~1591年)にすでに築かれた砦を慶長年間(1592年~1595年)に軍事・海運の要衝として大改築して出城としたと伝えられる。

関ヶ原の戦い後、小早川氏の後を受けて池田氏の備前領有が始まると、慶長8年(1603)池田長政(池田輝政の末弟)が3万2千石を得て下津井城主となり、常山城の施設を移築して慶長11年(1606)に至って近世城郭の形態を整えた。長政の死後、慶長14年(1609)池田由之がこれに代わり、慶長18年(1613)輝政没後、忠継が岡山城に入ると、荒尾成房とその子成利が寛永9年(1632)まで父子2代にわたって約20年間下津井城を預かる。その間、岡山城主は忠継から忠雄に移り、寛永9年、国替えによって光政が岡山城主となると、池田由成(由之の子)が下津井城に移り、3万2千石を領して児島郡一円を支配した。しかし、幕府の一国一城令によって、寛永16年(1639)下津井城を廃して由成は天城に陣屋を造築し、以来、明治維新まで天城池田氏は岡山藩家老としてここに留まる。天城の海禅寺・正福寺・遍照院には下津井城の遺構の一部が残されている。

城山の標高60m以上の尾根が城域となり、面積約13万 km^2 。本丸・西丸・二の丸の跡が半壊状態で石垣に囲まれて残っており、さらに東部の堀切を隔てて東側の郭も残っている。下津井城は土堀の囲む近世城郭の内容にあつたと判断されるが、付属的な主要部には土塁もあり、戦国期の城郭構造の一端をも残している。



下津井城付近図(上)と下津井城平面図(下)(原図は山本慶一著『下津井城の研究』による)

《下津井城中心部縄張図・周辺地形図》 『日本城郭大系13広島・岡山』より

宝島寺 (ほうとうじ、倉敷市連島矢柄5633)

倉敷市連島(つらしま)矢柄にある真言宗御室派の準別格本山。阿弥陀院。山号は矢上山(やあがりさん)。本尊は十一面観音。脇侍は不動明王・毘沙門天。

寺伝によれば、貞観元年(859)に理源大師聖宝によって開基された。古代・中世には広大な寺域、多くの塔頭(たつとう)をもった。江戸時代に2度の火災に遭い、規模が縮小した。近世には寺領15石。3か院・末寺10か寺を有し、寛政3年(1791)「備中国古義真言宗本末帳」によると、本寺は仁和寺、寺中7か寺、末寺10か寺であった。

寛保元年(1741)寂庵が住職となって中興した。寂庵は悉曇(しつだん=梵語)学者であり、書をよくした。明治7年(1874)ころ雲照が住職となり、困難な時代を切り抜けたが、第2次世界大戦後は阿弥陀院1院のみになった。

建物では室町時代の作である仁王門が岡山県下では屈指の古建築で、桁行17尺6寸(5.3m)・梁間9尺6寸(2.9m)、切妻造・本瓦葺の平屋建て、三間一戸の八脚門と呼ばれる門である。幅8尺(2.4m)の中央通路の両側に金剛垣があり、仏法守護の金剛力士像が安置されている。

庭園は小堀遠州の手になると伝えられる枯山水である。仏頭(県指定文化財)・香紙切など150点の「古筆手鑑」などがある。5000点有余の資料については『宝島寺所蔵歴史資料目録』(当寺刊)がる。旧暦3月4日(開基の日)の観音会式(通称「花の四日」という)、旧暦8月3日の寂庵命日は有名な行事で参詣者が絶えない。



《宝島寺本堂》

【参考】寂厳（じゃくごん、元禄15年～明和8年[1702~1771]）

江戸中期の学僧、能書家。字は諦乗（ていじやう）。寂厳は法名。『続日本高僧伝』では富永氏としている。現在宝島寺に残されている資料から備中足守藩安富家に生まれたとされているが、実は同族の村医者岩田家の出身だとの説が有力である。宝永7年（1710）10歳で吉備津神社の社僧、普賢院の超染について僧籍に入った。このとき法名を寂厳、字（あざな）を諦常（ていじやう、後に諦乗）とした。

享保2年（1717）修学のため上洛、五智山で悉曇（梵語＝サンスクリット語）の講義を聴いたのがきっかけで、生涯を悉曇研究に捧げるようになった。享保5年（1720）19歳の時、倉敷の寿量山円福寺の住職となり、以後39歳まで21年間務める。このころ悉曇学を独習、一時、法念（ほうねん）の法名を名乗る。元文元年（1736）には城洛中に悉曇の先学、曇寂（どんじやく）からから本格的に悉曇学を学び、大成した。寛保元年（1741）備中連島（つれしま、現倉敷市）の宝島寺の住職となり、倉敷・岡山などで悉曇学を講義、明和4年（1767）66歳の時、宝島寺を高弟文徹（ぶんしやう）譲り、倉敷の玉泉寺に引退して学問に専念した。著作としては『宝島寺記』『松石余稿』『梵本般若経私記』『梵本阿弥陀経私記』等がある。明和8年（1771）70歳で入寂。遺言により生地足守、普賢院、円福寺を望見できる宝島寺裏の大平山（おおひらやま）山頂に埋骨された。

寂厳の書は直截（ちやくさい）簡明な書風で知られる。その書は『続日本高僧伝』でも賞賛され、揮毫を求める書簡が宝島寺に残っている。明治の末年、自らも書に造詣の深かった犬養木堂など同郷人の熱心な収集が始まり、遺墨集も数種発刊された。慈雲・良寛とともに近世後期の桑門（僧侶のこと）の三筆と称されている。

【参考】宝島寺菩薩頭部

宝島寺にある中世の仏像。檜材の木造寄木造。漆箔（しはく）。現高34.2cm。ある菩薩像の頸（くみ）以上、天冠台以下が残ったものである。

耳の前後で矧（は）ぎ、頸部（くみ）と胴体との間に割頸にしてつないだもようである。内割（うちきり）は比較的少なく、割目の断面はかなの厚い。とかも玉眼を用いず、彫眼にしているところも、鎌倉時代としては古格の手法をみせている。しかし、頭部全体の表現はきわめて的確で、面相は端麗と評してよく、13世紀、鎌倉時代最盛期のまれにみる傑作である。それだけにこの像が仏頭だけが残っていないのは惜しみて余りあ



《宝島寺菩薩頭部》

る。残念ながら非公開である。

簀取神社（倉敷市連島西野浦3198）

簀取（はとり）神社は高梁川河口に広がるデルタを見下ろす西之浦の丘陵上にある。この山麓の南に亀島新田・鶴新田という江戸時代に開発された地域があり、明治時代までは倉敷市酒津の八幡山北麓で東西に分かれた東高梁川と西高梁川に挟まれていた。この地は江戸時代からたびたび洪水の被害を受けたので、明治40年（1907）から大正14年（1925）にかけて高梁川大改修工事が行われて酒津で東高梁川は締め切られた。廃川地とな



《簀取神社本殿》

った地域には、倉敷絹織物（現クラレ）酒津工場・三菱重工水島製作所などの工場や水島臨海鉄道が建設された。

この西之浦で生魚問屋を営んだ富島屋三宅氏は江戸時代大三宅と呼ばれ、代々庄屋を務め、同所で米屋を営んだ三宅氏とともに鶴新田の開発にあたった。西之浦には各種の問屋が軒を連ね、船の出入りも盛んだった。

その船乗りの崇敬を受けたのが簀取神社である。無格社であるのにも関わらず、広大な境内に立派な社殿をもち、多くの人々の信仰を集めた。同社に残る板額には「海若宮」とあり、寛政3年（1791）に三宅伊左衛門が寄進した石鳥居にも「海若宮祠前」と刻まれていることから、古くは海若宮と呼ばれていたことがわかる。

簀取大権現と呼ばれるようになったのは天保年間（1830年～1844年）のころからで、祭神は大綿津見命・豊玉姫命・玉依姫命と伝えられている。寛政年間（1789年～1801年）までは米屋三宅氏の寄進が多く、米屋の氏神といわれていたが、安政年間（1854年～1860年）からは新興の富豪福島屋の早瀬氏など船問屋の寄進が増えている。現在の本殿は安政5年（1858）、神輿庫は天保6年（1835）、拝殿・祓殿・回廊・絵馬殿・社務所は明治8年（1875）の新築である。また、参集殿が昭和63年（1988）に建設された。

また、境内の一角に「神恩洪大」と刻まれた石碑がある。これは倉敷市出身の大本教主補、出口日出麿の書で、青少年時代、当神社によく参詣していたことを記念し、昭和51年（1976）11月23日に建碑された。石碑の高さは4m、重さ35t。四国伊祖の青石（緑泥片岩）製で、稀有（けう）の名石と

されている。

境内からは水島臨海工業地帯が一望できる。石油化学と鉄鋼を2本柱とするこの重化学工業地帯は、第2次世界大戦後「農業県から工業県へ」というスローガンのもとで企業誘致と開発が進められた。「新産業都市の優等生」と呼ばれる反面、公害やコンビナート災害などの課題も多い。

厄神社と薄田泣菫詩碑（倉敷市連島町西之浦）

厄神社は鏡取り神社から1 km ほど東の丘上にある。境内にはこの地出身の詩人薄田泣菫（すだきゅうもん）の立派な詩碑がある。

疫神・厄神（やくじん）とは病気などの災厄を祓うために祀る神をいい、その威を和らげ鎮める祭を疫神祭という。平安時代には、この神を皇居の隅に祀ったり、京都府八幡市（やたい）の石清水八幡（いしみづはちまん）に勧請された厄神社に参詣する信仰があった。東北地方に伝わる2月8日の厄除け行事、節分の追儺会（ついなえ）は疫神祓いの行事である。想像される疫神の姿としては、赤い革の着物に冠をつけた女の姿とか、青ざめた白髪 of 老人などが空想されてきたが、近世になっては一般に『餓鬼草紙』に描かれているような瘦身裸体（そうしんらたい）の鬼の姿が多い。

岡山県下では備中中南部から瀬戸内沿岸にかけて、「厄神社」と呼ばれる神社が多い。ことに成羽川流域が多く、たとえば、川上郡備中町の平川の「厄神北」「厄神西」はこれに因（よ）んだ地名である。また、邑久郡牛窓町紺浦の疫神社は10月24日の秋祭りに奉祭される唐子踊りで知られている。今回探訪する倉敷市連島西之浦の厄神社は堂々たる社殿の構えで有名である。

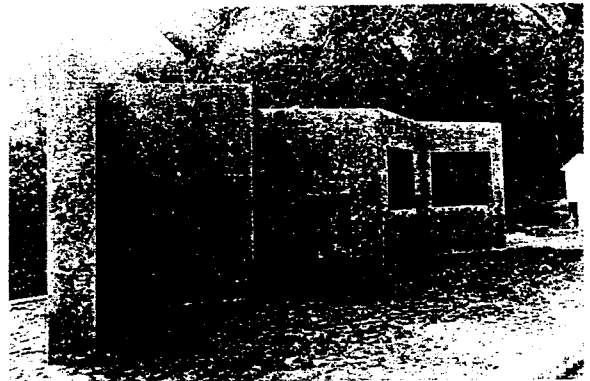
詩碑は六曲屏風をかたどり、『白羊宮』の中の「ああ大和にしあらましかば」の陶板がはめ込まれている。

【参考】薄田泣菫

（明治10年5月19日～昭和45年10月9日〔1877~1945〕）

詩人・随筆家。岡山県浅口郡連島村大江（現倉敷市大字連島字大江）に生まれる。本名は薄田淳介。

岡山中学校（現岡山県立朝日高等学校）3年のとき退学し、京都での勉学を志したが、さらに転じて上京。18歳から上野帝国図書館で独学し、詩人



《薄田泣菫詩碑》

への道をひた走った。

明治32年(1899)大阪金尾文淵堂から第一詩集『暮笛集(ぼてきゅう)』を出版。新しい〈絶句〉体(ソネット風8・6調14行詩)をが好評を得、明治34年(1901)の『行く春』は初版を発売即日に売り尽くしたといわれる。その後『小天地』『明星』『早稲田文学』などの誌上に作品を発表。明治36年(1905)発表の『二十五絃』(春陽堂)、明治37年発表の(1906)『白羊宮(はくようきゅう)』(金尾文淵堂)は蒲原有明・上田敏・与謝野寛らの絶賛を受け、島崎藤村に続く時代の先駆的詩人として認められた。



《薄田泣菫像》

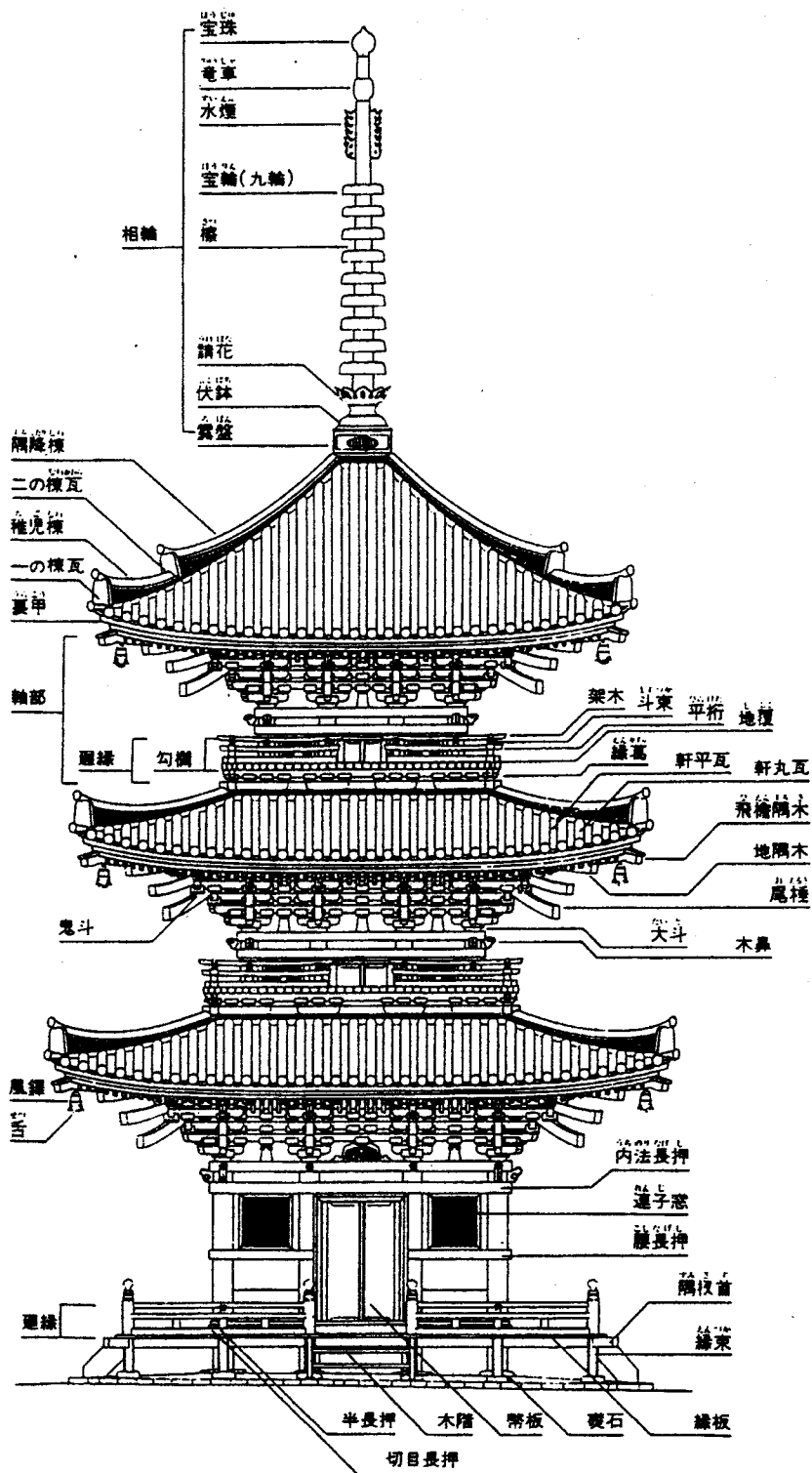
とくに「公孫樹下に立ちて」「ああ大和にしあらましかば」などは多くの詩人の愛誦されるところとなった。この「公孫樹下に立ちて」は県北那岐山菩提寺の大木を歌ったものと一時思われていたが、のち津山市長法寺の大銀杏であることが松村緑らによって証明され、作因となった竹内文子との交友も明らかにされた。

大正元年(1912)大阪毎日新聞社へ入社し、夕刊に「茶話」を書き始め、大正8年(1919)に学芸部長となってさらに随筆を書き続け、愛読された。また、学芸部長として菊池寛、芥川龍之介を起用し、新聞連載小説に新たな局面を広げたのも大きな功績である。大正12年(1923)パーキンソン氏病にかかり休職。しかし、『太陽は草の香がする』『艸(草)木虫魚』『猫の微笑』など名随筆集を毎日新聞社から出版。病苦の中から自然および人間生活を親愛の眼で書き続けた。

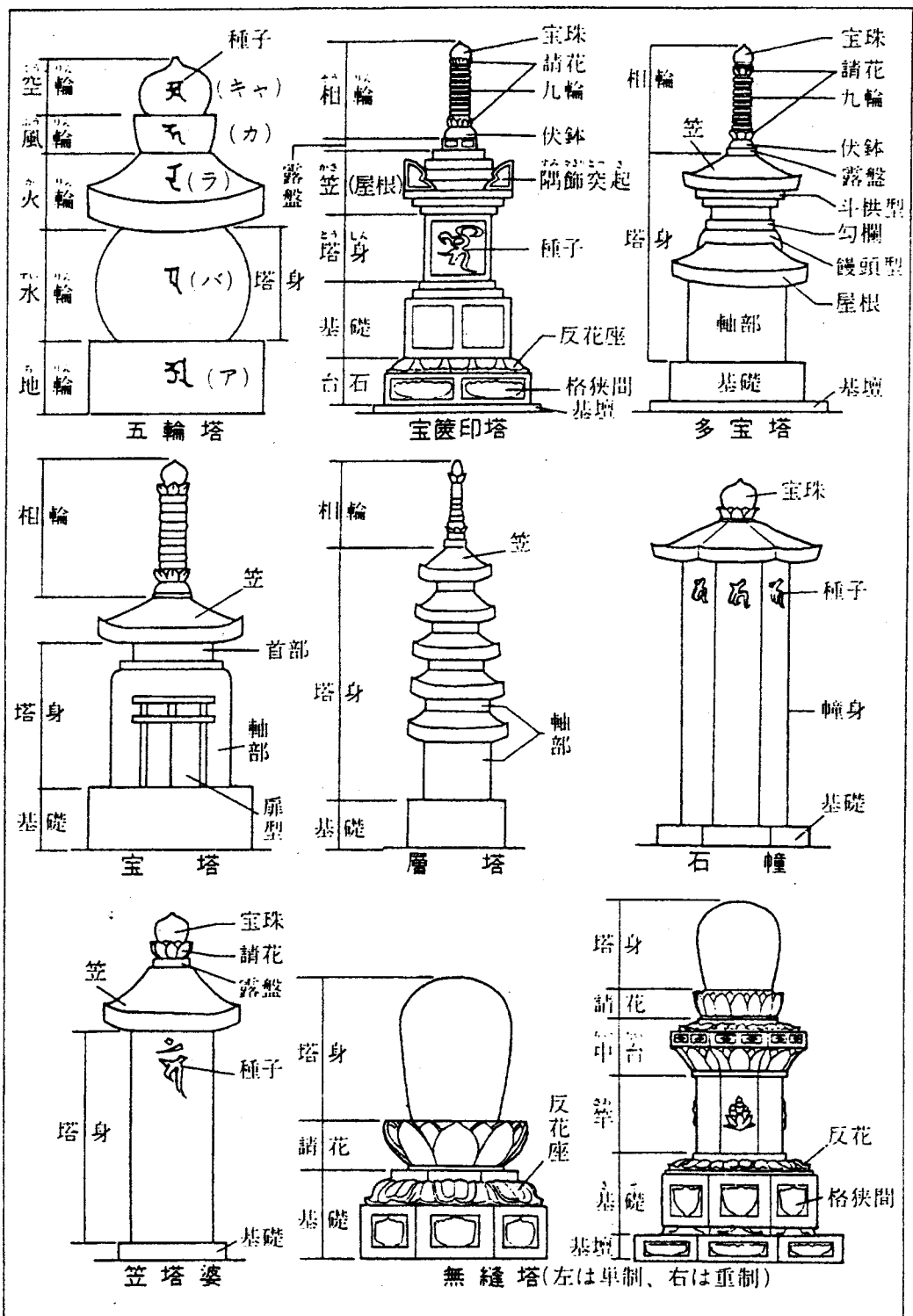
昭和19年(1944)倉敷市に疎開、第2次世界大戦終戦の年の10月の初め待望の生家へようやく戻ったが、すでに病は篤く、10月9日に没した。記念碑は連島の厄神社境内と津山の長法寺境内にある。

前者は昭和29年(1954)除幕、撰文(せんもん)を日夏耿之介(ひなつこうすけ)、設計は谷口吉郎、屏風形で自筆史陶板に焼きはめ込んだわが国有数の文学碑である。後者は境内に2基あり、ゆかりの公孫樹の詩がそれぞれ1節ずつ彫られている。その他子供向きのものも含め著書は多いが、昭和13年(1938)『薄田泣菫全集』(7巻、創元社)が出版されている。

資料作成 平田恵彦 (歴史民俗研究部会副部会長)



《一般的な三重塔の各部の名称》
 (注意) 遍照院の三重塔とは若干異なっている。



《石塔の種類》

石塔は形状が変化に富んでいる。ここにあげたものはあくまでも代表的なもので、時代性・地域性がある微妙に異なっている。

